

夢という存在

村上市立神納中学校三年 増田 泉輝

みなさんに夢はありますか。僕には、「箱根駅伝に出場する」という夢があります。

小学校低学年のときは、体力もなく、決して足が速いほうではなかったのが好きではありませんでした。しかし、小学校四年生のマラソン大会でいい成績をとったことがきっかけで自信が付き、それから走ることが好きになりました。さらに、五年、六年といい成績をとれたことで、更に自信が付き、「もっと速くなりたい」と思うようになりました。

そして、その頃から長距離での呼吸方法や、ランニングのフォームなどをネットで調べ始めました。調べていくうちに、ある競技を知りました。それは「駅伝」です。知っている人も多いと思いますが、チームでたすきをつないで、順位を競う競技です。それを知った僕は、「箱根駅伝」や「ニューイヤー駅伝」など、より詳しく調べてみました。必死にたすきをつないでいるところやデットヒートを繰り返しているところ、一位になったチームの喜ぶ場面を見て、「かっこいい」「僕もこういう風になりたい」と思うようになりました。このときから、僕の夢が始まりました。

中学生になり、郡市陸上大会がありました。僕は三千メートルに出場しました。必死に走り込みを行っていたこともあり、「入賞できるだろう」と思っていました。しかし、実際に走ってみると全然だめで、中学校での現実を知りました。その後、駅伝の練習も始まりましたが、僕はみんなの足を引っ張ってばかりでした。そして、「もう走るのやめようかな」と思うようになりました。

そんな僕の立ち直りのきっかけをくれたのは、二冊の陸上の漫画です。どちらも陸上を諦めようとした主人公が、仲間のおかげで夢を実現するお話です。しかし、大きく後押ししてくれたのは、現実世界の仲間の存在でした。記録が伸びずに悩んでいたときも、「練習すればじきに伸びる、気にするな。」と励ましてくれました。辛くて諦めようとしたときも、一緒に走る仲間がいたから頑張ることができました。一人で走るとき、「お腹すいたな」「疲れたな」と考えている僕も、駅伝のときは違います。「たすき」をかけているから、待っていてくれる人がいるから、できるだけ速いタイムで、いい順位でつなごうという気持ちになります。

駅伝の「たすき」はただの布ではありません。みんなの願いや思いが詰まっている、とても重く価値のある布です。そのたすきを肩にかけて走るというのは、みんなと一緒に走るということです。みんなと一緒にだから頑張れる、強くなれることもあるのではないのでしょうか。これこそ駅伝のすばらしさだと思います。

このことは、駅伝以外のことでもいえると思います。目には見えないけれど、人をやる気にする、温かく支えてくれる、そんなたすきは確かに存在します。

僕は今年、体育委員長になりました。応援委員会を兼ねているため、主な仕事は、激励会の運営、球技大会の企画などです。体育委員会は、大きな声で応援するのが恥ずかしいのか、他の委員会と比べてあまり人気がありません。しかし、今まで、学校を代表する選手のために、一生懸命に応援する先輩を見てきて、僕は恥ずかしいどころか、かっこいい

と思いました。だから、先輩方が引き継いできた伝統をよりよくできるように、僕は「応援の声を大きくすること」に力を入れています。「頑張れ」という気持ちを込めて、枯れるくらい大きな声を出しています。その結果、だんだんと声が出るようになってきたと思います。

委員会だけではありません。毎年盛り上がる体育祭、個性的な作品が集まる文化祭、涙で別れを惜しむ卒業式、どこの学校にも負けないキレイな校舎。僕たちには、今まで学校を創りあげてきた先輩方がいて、僕たちの後にはそれをつないでいく後輩がいます。ゴールはないし、周りとの競争もないけれども、今までの伝統をよりよいものとして先輩からの「たすき」を後輩へ、つなげるように頑張っていきたいです。

僕につながってきた「たすき」はこれだけではありません。昔の人たちが創りあげてきた社会の「たすき」、親から代々引き継がれてきた家族の「たすき」。重く、価値のある「たすき」の存在を確かに感じながら、自分の役割を意識して生きていきたいです。

みなさんに夢はありますか。僕の夢は「箱根駅伝に出場すること」そして、「僕につながってきた『たすき』を次の人達へつなぐこと」です。